公開講演

イスラムの包容性について

――特に中世のバグダードを中心に――

――日本人の間に存在する偏見を分析する

牟田口義郎

私はアラブを中心としたイスラム世界について長い間勉強して来た者でございますが、本日はイスラム世界でなく、イスラムそのものを演題に選んでしまい、講師として果たしてその任に耐え得るかどうか、反省するところしきりでございます。しかし、イスラムの特質のひとつである「包容性」については、あるいは皆さまのなかに「意外」と思われるかたもおられるのではないかと想像し、この角度から私の考えを述べて、皆さまのイスラム理解の足しにしていただければ――と希望している次第でございます。そこでこのテーマをどのように料理すればよろしいか、あれこれ考えまして、とりあえず四つの柱を立ててみました。

最初はイスラムは砂漠の宗教であるかということです。イスラムはメッカで生まれました。この地域は現在では中東といって、みなさまがすぐ連想されるように砂漠地帯です。そこでイスラムは砂漠の宗教だという説がまかりとおっている。はたしてそうであろうか。これについては副題を「日本人の間に存在する偏見を分析する」としたことと関係があります。日本人の偏見について、それと同時にヨーロッパ人の間に存在する偏見について、この二つの偏見がどのようなものであるかを、具体的な例をあげて考えてみたいと思います。

二番目の柱は「ムスリム、つまりイスラム教徒はゆりかごから墓場まで学べ」ということです。これは教祖である預言者ムハンマドの言葉でありますが、われわれ一般に浸透している偏見から言うと、イスラムは狂信的な宗教となっているので、それに対するアンティテーゼのひとつとしてムハンマドの言葉をあげた次第です。

三つ目の柱になって本論になるんですが、狂信性とは対極をなす包容性あるいは寛容性がなかったならば、イスラムは決して普遍的文明を生まなかったであろうということです。イスラム文明は俗にはサラセン文明と言われていますが、この文明がもつ包容性を具体例をあげて考えることにします。

最後には九世紀のバグダードを舞台に、アラブ・ルネサンスの成り立ちを考察してみたいと思います。これは三番目の柱の土台ともいえます。

こうみますとたいへん風呂敷を広げすぎたように感じますが、時間も短いことですから、要するに、イスラム文明のもっている寛容性についてある種の御共感をいただければ幸いと思っている次第でございます。

本論にさっそく入りますが、日本人の間に存在するイスラムに対しての偏見を「砂漠の宗教である」というキャッチフレーズと関連させて考えてみたいと思います。

次のようなエピソードを、私はある翻訳書で読みました。筆者のドイツ人ジャーナリストの体験なのですが、彼がアフガニスタンとパキスタンの国境の町のバザールで買物したとき、店のおやじが「名はムハンマド」というので、話のついでに、モーセ、イエス、ムハンマドという三人の預言者のうち、なぜムハンマドが最も偉大かと尋ねました。するとおやじは水パイプを一服悠然とくゆらしてから、こう断言したそうです。

「ムハンマドは実業家だったから」

彼はこの発言をキーワードとしてイスラム理解を深めたと書いています。なるほど、モーセとイエスは偉大な預言者であったが、職業が何であったかは全くわからない。それに反し、ムハンマドはわが国の奈良朝時代、聖徳太子とほぼ同時代人（太子の没年がイスラム暦元年）ですから、彼の生涯はわかっている。彼はメッカの商人でした。その職業をバザールのおやじが、他の預言者以上の偉大性の理由として挙げるところがおもしろい。私は、ここにはイスラムの本質がかかわっている、と考えます。イスラムは商人が興した宗教なのです。

商人は砂漠の民でも農民でもありません。商人は都市に住んでいます。ムハンマドが生まれ育ったメッカはアラビア半島最大の物資の集散地、換言すれば国際的な貿易都市でしたから、「商人にあらずんば人にあらず」というようなことわざが、当時のメッカにはあったそうです。商人は支配階級だったわけで、ムハンマドはそのなかでもいちばん羽ぶりのよかったクライシュ族のハーシム家の出身で、四十歳ぐらいまでは国際貿易に従事していました。したがって、隊商を率いて砂漠を往来しましたが、そして砂漠をよく知ってはいたが、本質的に、砂漠の民ではありません。

ですから、イスラムの聖典である「コーラン」には商業用

語がたくさん使われています。こういうわけで、イスラムには商業都市の倫理、価値、規範が形を変えてふんだんに盛り込まれている。それと同時にこの地域は乾燥地帯で砂漠を中心として遊牧民（ベドウィン）が住んでいます。ベドウィンは闘争心にあふれている。こういう人たちを取り込むために、「コーラン」には、遊牧民のもっている伝統的な価値、規範も多分に盛り込まれている。ですからイスラムは砂漠の宗教ではなく都市宗教であることはまちがいないが、砂漠性を一切否定してしまうと、それは決してイスラムを全体的にとらえるものではないことになる。「イスラムは砂漠の宗教である」と最初に言った人はヨーロッパの一九世紀の宗教学者なんですが、これは二〇世紀の現在では否定されております。

次に移りましょう。イスラムの狂信性を示すキャッチフレーズに「剣かコーランか」、あるいは「右手に剣、左手にコーラン」というのがありますが、これはいったいだれが、いつごろ唱えたのでしょう。

インテリのアラブ人とある日話していたとき、ふと思い出して、「剣かコーランか」という言葉を知っているかと聞いたら、知っているというので、右の質問をしてみました。すると返事はこうでした。「われわれの方からそんなことをいい出すわけがない。十字軍戦争に負け、中東から追い払われたヨーロッパ人が、くやしさからいい出したのだ。あれはわれわれの宗教に対する彼らの偏見と憎しみから生まれたのだ」。

そして、逆に私に質問しました。「君は現地の事情に詳しいから、右手と左手の関係を知ってるだろう」。そこで私は答えました。「なるほど、〈右手に剣、左手にコーラン〉は成立しないね」。どういうことかと申しますと、イスラム教徒は右手で食事、左手は不浄のために使うから、不浄用の手で聖典をもつわけには行かない。では「コーラン」を右手でささせばいいわけだが、それでは左手で剣をもつことになってしまう。だからこうしたキャッチフレーズは、ヨーロッパ人の偏見の産物ということになるのです。

日本に長く住んで勉強し、学位ももっている彼は、こうつけ加えました。「日本に来て、日本人がそんなことをまだいっているのを知って驚いた」。彼の追加説明はこうです。「これは日本の近代化一〇〇年の政策のせいだ。日本人は西洋に追いつき、追い越そうとした、西洋のものは何でもいいと思って勉強した。西洋人の偏見まで入って来たのはそのためで、日本人にはまだそれを識別する能力がなかった」。――一理ある見解ですね。

実際、アラブの歴史を勉強してみますと、彼らは決して二者択一を迫っていないことがわかります。どんどん征服して行くけれども、被征服民に決してイスラムを押しつけてはお

りません。これは史料によっても明らかであります。そこで、一つの例を挙げてみたいと思います。

アラブの膨張は、六三二年にムハンマドが死んでから始まるのですが、早くも六三八年には北上してササン朝ペルシアの軍と対決する。現在はバグダードの南の方にあるカーディシーヤという平原で相手を破ってペルシア滅亡の原因をつくるわけです。その時の記録がアラブの歴史家によって残されている。これはアラブ初期における最大の歴史家とされるアル＝タバリーで九世紀の人ですが、彼はアラブ最初の年代記となった著作の中でこの合戦の本末を書いています。それを見ますと、アラブは先に述べたような二者択一を迫らず、三つのチョイス、選択肢を与えて、その中から一つを選べといっていることがわかります。そのうちの二つは剣かコーランかなんですけど、さて、三つめというのは何か。その答えを出す前に、まず原文を読んでみましょう。

最初に、アラブ軍の司令官が相手のササン朝ペルシアの皇帝のもとに使節団を送って交渉を始める。いきなり攻め込んで戦争を始めるわけではない。敵は大国、こちらは劣勢ですから、相手の腹を探り、時間かせぎをするわけです。首都のクテシフォンに着いた一行は、生まれて初めて見る大宮殿の威容にも臆せず、任務を全うします。団長ヌーアマンの口上は次のとおりです。

「われらはこれまで過ちの中に生きてきたが、神はわれらをあわれみ、一人の預言者を送られた。われらの同胞で、その上もっとも高貴な家柄のお方である。彼はわれらを異教の闇からまことの教えの光の方へ導かれた。いまや彼は亡くなられたが、この世でわれらの教えに属さぬ者すべてと戦えと遺言された。すなわち、その者らは、教えに帰依するか、貢納するか、あるいは武器をとって抵抗するかを選ばなければならぬ。もし教えを信ずれば、われらは汝に王国を残そう。信じたくなければ、貢納せよ。両者のいずれも望まぬとなれば、戦いの用意をせよ」

教えを信じれば今のままでよく、信じたくなければ降伏して貢ぎ物を納める。両者もいやだったら戦争だというわけです。それで皇帝は答えました。

「この世にはトルコ人、インド人、その他多くの民族がおることを余はこの目でながめてきたが、汝らほど見すぼらしいのを見たことがないぞ。ネズミやヘビを常食として、着るものとしてはラクダや羊の毛で織った衣服しかないではないか。去って故国へ戻れ。汝らに必要な食料を配り、汝らが選んだ男を総督にしてつかわそうぞ」

その時使者の一人が反論した。

「仰せまことにごもっともである。飢えと赤貧がわれらの過去であった。しかし神はわれらに預言者を与えられ、その教

えによってわれらは強くなった。かくて今や、アラブの王が、三つの問いに答えよと、汝のもとへわれらをつかわしたのである」

このように、三つの選択肢は早くもはっきりと史書の中に現れております。しかし、その後一〇〇年のアラブ帝国の征服の跡を見ますと、彼ら征服者は、イスラムに帰依する連中がでてくるのを拒否して、貢納する方を望んだことがわかって参ります。考えてみるとこういうことになります。もし剣をとったら戦争になる。勝つかもしれないが負けるかもしれない。いずれにせよ犠牲者がでます。だから戦争に訴えることはこの三つの選択肢の中で最悪の選択である。ですから、いちばん望んだのは降伏なんです。被征服者は降伏によって信教の自由と身分、財産は保障されるわけですが、これを行為によって表さなければならない。何かと言いますと、貢納です。税金を納める。そしていままでどおりの生活をしていく。こういうわけでアラブは政治的な大発展をとげます。こういう基礎はムハンマドの後を継ぐ第二代カリフ――カリフとは後継者という意味ですが――のウマルという人が確立したといわれています。

この、降伏という選択肢は、考えようによっては寛容の精神の表れです。これによって帝国の財政的基盤も固まるんですが、ここにはイスラムの現実主義的性格がよく出ていると思います。

ムハンマドはイエスやモーセと同じく宗教家であることはまちがいない。しかしながら彼の経歴を見ますと、異教徒を従わせるために軍を率いて戦っている。だから軍司令官としての才能があった。その後では、死ぬまでに一所懸命イスラム共同体というものをつくろうとしていますから、そういう点では政治家であった。こういうわけですから、この三つを合わせた天才、これがムハンマドです。イエスやモーセには軍人とか政治家といった特質が欠けていたのではないでしょうか。

この三人は預言者で、信ずる神は名前や呼び名が違っても一つである。イスラム教徒はこれをアッラーといいますね。それで神はこの預言者たちを通じて啓典をつかわされる。バイブルです。ユダヤ教には『旧約』、その中の「モーセの五書」です。キリスト教徒には『新約』、「福音書」です。それからイスラム教徒に『コーラン』。ですからイスラム教徒はユダヤ教徒、キリスト教徒をバイブルの民、啓典の民として同族視しているわけです。その他の宗教、たとえばゾロアスター教、ヒンズー教、仏教、その他シャーマニズムというものの信徒よりはるかにランクを上にしている。そして神はこれまでにこの世に数々の預言者をつかわしたけれども、その中でムハンマドはいちばん最後にこの世につかわされた預言

者で、最も偉大である。ムハンマドが伝えた神の言葉である『コーラン』は前の啓典の『旧約』と『新約』の不備をおぎなって完全なものである。こういうふうに考える。しかしキリスト教徒はそれを否定しますね。イエスの後に預言者はないのです。あってはならないのです。だからイスラムが一神教であることはわかっているけど、イスラム教徒が唱える〈イエスよりも偉い、『コーラン』は『福音書』よりも完全である〉という考えは断固否定する。そこでイスラムとキリスト教との確執が起ってくると考えられます。

ここで、イスラムに対する西洋人の偏見というものについて御紹介しましょう。

西洋人の偏見は、ムハンマドは本当に預言者であるかという疑問から出発します。私はヨーロッパにおけるイスラム研究の跡を知りませんので、ここに持参しました参考書の紹介から始めます。わが国最高のイスラム学者で、日本よりも世界で有名な井筒俊彦先生が岩波文庫で『コーラン』を翻訳されていますが、この方が岩波書店から『イスラーム文化』と『コーランを読む』という本を出しておられます。後者を見ますと、「何世紀にもわたってヨーロッパでイスラームについて書かれて来た本を読んでみると、本当に驚きます」というんです。ムハンマドは神の使徒ではない。預言者ではない。つまり、疑問に対する答えは「否定」となる。では、どんな人物か。彼らが使った形容詞を列挙しますと、「大山師」「詐欺漢」「うそつき」「サタンの使徒」「悪魔の手先」「てんかん持ち」「自己催眠にかかった下劣な男」「精神病者」――こんなふうになっております。

それから、私が読みました参考書にはこういうことが書いてありました。「中世ヨーロッパでは、預言者ムハンマドは用便中にブタに八つ裂きにされて死んだ異端の教祖であると考えられた」。そこで彼は憎悪と悪罵の対象になります。

また、中世ヨーロッパ文学の傑作と言われるダンテの『神曲』にも、ムハンマドは悪意をこめて描かれいます。彼はまさに中世の人で十字軍時代の末期、一二六五年に生まれて一三二一年に死んだ。ということは十字軍が中東の大地からひとりのこらず追い払われた後の人です。ダンテの頃はキリスト教世界が歴史で名高い教会大分裂、つまりローマの法王、南フランスのアビニョンの法王の二つに分かれてしまった。それでこの『神曲』の「地獄編」第二八歌では、ムハンマドは教会分裂の仕掛け人のひとりともされている。そこで、この醜怪な描写をこれから読みます。イスラム世界向けの翻訳では、この部分は省かれているそうですが、それがなぜかと言うことは、すぐおわかりと思います。ムハンマドは地獄へ落ちている。ダンテはそこで彼を見る。

「縦板か横板がはずれた樽だって、私が見た亡者ほど大口を

あけていなかった。顎から屁をするところまでザックリ裂けた亡者ほど。／足のあいだに腸がぶら下がり、肺はあらわに、飲み込んだものから糞をつくる汚れた袋もむき出しになって。／そのさまに目は思わずもくぎづけになった。すると相手はこちらを見、われとわが胸を開いて言う。さあ見よ、わしがわが身を裂くさまを！／これぞ切断されたるマホメット。わが前を行くのはアリー（ムハンマドの娘婿でイスラム分離派であるシーア派の祖）じゃ。前髪から顎のところまでザックリ裂けて。／お前がここで見るものはみな、うき世では醜聞と分離の種まき手だった。それゆえにこそ、かくも引き裂かれておるのじゃ。／苦しみの道のひとめぐりをすますと、ほれ、うしろに控えている鬼が、われらの群れのひとりひとりを剣の刃にかけ、／このとおりのむごい目に合わす。こやつの前に戻ってくるまでに、傷口はふさがってしまうんでのう。／だがおまえは誰じゃ、橋の上で時をつぶして眺めておるのは。おのれの罪に下った罰を受けに行くのを、たぶん引き伸ばしておるんじゃろうて」（下略）

こういうわけです。たいへん醜悪な描写になっていますね。

こういうような偏見というものは明治以後日本にも入ってくる。そこで井筒先生の本を読みますと、ヨーロッパ人のイスラム再認識、正しく見るという動きはいつ頃から始まったかという論考がございますが、それを見ると一九世紀、近代の全盛期です。皆様は名前を御存知だと思いますが、イギリスにカーライルという歴史家がいます。彼に『英雄崇拝論』という著作があって、これはたぶん、むかし岩波文庫にも訳されていたと思うのですが、この中で英雄の中にムハンマドもでてくる。この本が出たのは一八四四年であった。この中でカーライルはムハンマドは誠実な精神界の英雄であると言っているそうです。おそらくこれがヨーロッパにおけるイスラム再認識のはしりではないかと考えます。

ところで日本との関係を見ますと、明治維新は一八六八年ですから、明治時代では、まだまだヨーロッパにおけるイスラム再認識は日本に入ってくる余裕がない。日本人は幕末から明治にかけての先覚者たちの努力で世界の事情を知るわけですが、その中で、文明開化の柱であった福沢諭吉がイスラム世界をどう見たかを御紹介したいと思います。彼は明治維新の翌年、明治二年に『掌中万国一覧』という本を出しています。その中でどう書いているかと言いますと、私はこの本を読んだわけではないので、参考書からの孫引きになります。日本における中東学と申しますか、そういう学問の草分けである小林元（一九〇四～六三）という先生がおられます。この方が昭和一五年ごろ書かれた『日本と回教圏の文化交流史』という本がございます。これは日本書紀から江戸時代の終わりまで史料に基づいて比較検討している大へん貴重な労作で

すが、その中の結論の一ページに福沢諭吉の『掌中万国一覧』が引用されている。それまでに述べていることは、要するに、明治以前における日本人の回教（その頃はイスラムと言わずに回教と言っていた）および回教圏知識は、たとえ時代とともに成長しているとはいえ、ついに系統化ないし組識化の域には到達していない。つまり直接ではなく中国人や韓国人、それからキリシタンやオランダ人たち、そういう外国人をつうじての間接的なものであった――というのが結論であって、「かくて、日本人は回教徒を回教徒として意識する日を（明治維新まで）迎えなかったのであろう。そうして、それは決して不合理なことではない。なんとなれば日本人は多くの場合、回教徒に対して通商的態度以上のものを示そうとはしなかったからである。その意味において、明治以前において日本人の回教および回教圏知識が、結局、胎児に終わったのは当然である。かくて、鎖国政策が廃され、世界知識の流入を抑制した狭き門が広く開かれた直後、明治二年すなわち一八六九年に出版された（福沢諭吉の）『掌中万国一覧』において」――と小林先生は次のように引用します。

「（世界中の人口）およそ一〇億の人員をおのおの信ずる所の宗旨に従って区別すれば、その割合つぎのごとし。吉宗（ユダヤ教）四百万人。耶蘇宗二億四千万人。雑宗六億五千万人。回回宗一億人」

ですから福沢は明治においてイスラム教徒の存在を明確に認識した最初の人間であったけれども、イスラム圏の紹介については、依然「胎児的知識」を脱しておらず、こんなふうです。

「蛮野の民はやや進んで第二等に位し、天幕の下におり、牛、羊を追って所を移し、肉を食い、乳汁を飲み、耕作の法を知って食物の種類多し。文字なきにあらざれども、これを書し、これを読むものははなはだまれなり。粗造の器械なきにあらざれども、その製作きわめて拙なり。蛮野の民にも一群の酋長ありてシークスあるいはカンと称す。その法はなはだ残酷にして、かつ妄なり。韃靼（ダッタン）、アラビアおよびアフリカ北方の土人等これなり。未開とは教化をこうむっていまだあまねからず、風俗いまだ開けざるをいう。その民耕作の法を知ってやや巧みを致し、芸技の道を解して人間に有用の物多く、村落を立て都府を開き、文を忌み婦人を軽蔑し、小弱をしのぐ風あり。シナ、トルコ、ペルシアのごときはその最も著しきものなり」

これが日本最初の文明開化の人、福沢諭吉のイスラムに対する考え方であった。こういうわけですから、われわれ日本人のイスラム認識というのはずいぶん遅れてくるわけであります。

だいぶ長く述べて参りましたけれども、これとからんで次の〈ムスリムはゆりかごから墓場まで学べ〉ということに入ります。これはムハンマドの言葉でありまして、これを見るとイスラムは宗教ばかりではないということがわかります。さらに彼は補足してこういうことを言っています。「ムスリムはゆりかごから墓場まで学べ。学びの道を行くものは神の道へ最も近づくものである」現在の言葉で言えば学問を奨励しているわけです。単に宗教、神学ばかりではないのです。イスラム学者のイスラムに対する考え方は、だいたい三つあります。まず宗教としてのイスラム、次に政治としてのイスラム、それから文化としてのイスラム、この文化の中には生活様式も入っている。こうなってきまして国の経営から法律、経済そういうことまで一切が、また学問として、文化としてのイスラムも入ってくる。なぜそんなふうに普通の宗教でなく広がっていくのかというと、これはすべて神の言葉『コーラン』に書かれていると考える。ですからイスラム文化、あるいはイスラム文明というものは、井筒先生によれば、「究極的には『コーラン』の自己展開」になります。

実は、『コーラン』だけではそのような解釈は出てこないんですが、『コーラン』をめぐって存在するハディースというものを応用する。ハディースとはムハンマドの言行録といわれているものです。ムハンマドはイエスと違って神の子ではない。これはキリスト教とイスラム教の根本的な考え方の違いです。イスラム教徒はイエスを尊敬しますけれど、ムハンマドに先立った預言者の一人です。だから彼らには三位一体、つまり1＋1＋1が1になるなんてことは考えられないと言うわけです。

ムハンマドは人の子であって、神の啓示を受けなかった時も多かったが、そういう時でも、人びとの規範になるような言行を残している。そういう言行をムハンマドの死後、忘れられないうちに書きとめておこうと、初期のカリフたちが中心になって収集してまとめた。これがハディースです。

ところが、その後も収集が続けられ、ハディースは『コーラン』をめぐってどんどんふくれあがり、中にはインチキなものもまじってくる。井筒先生によりますと、「まんなかにある『コーラン』はそのプリズムを通して種々様々の意味に分裂して解釈されます。先ほど、イスラーム文化は究極的には『コーラン』の自己展開だと申しましたが、実は多くの場合、こういうプリズムを通しての、いわば第二次的、間接的展開だったのであります。この事態がイスラームの文化形成力に無限の可能性と柔軟な適応性を与えたことはまちがいございません」――ということになります。九世紀のバクダードで文明が栄えたのは、そういうようなムハンマド、正統カリフたちが残した遺産が学術の面で一挙に開花したというこ

とができましょう。

私はいちばん最初に、ムハンマドが商人であると申しました。そのため『コーラン』の中には商業用語がいっぱいある。これが『旧約聖書』や『新約聖書』とまったく違うところです。非常に現実的な商取引きが信者と神との関係に置き換えられる。都市に住んでいる商業民には非常にわかりやすいわけです。

それで一例をあげますと、これも井筒先生の御著者の中にあるのですが、私はこのような紹介を見てほんとうにイスラムに対して目を開いた気がしました。先ほど申しましたようにメッカは国際貿易の中心地である。彼が教えを広めたメディナもまた、商業や金融業の中心でした。ですから彼はほんとうに商業、金融業という社会的環境に育ったわけです。そこで、井筒先生はこう書かれます。

「聖典『コーラン』が商人言葉、商業専門語の表現に満ちているという事実もこの点できわめて示唆的であります。人間がこの世で行う善なり悪なりの行為を〈稼ぎ〉と考えることなどその典型的な一例です」

『コーラン』にはこのような章句があります。

「宗教を遊びとか冗談ぐらいに心得て、この世にうつつをぬかしている人々など構わず放っておくがよい。己れの稼ぎがもとで人間一人が破滅することもあるということをみんなに思い知らせてやるがよい」

こんなふうに、ここでは人間の背信行為の反復が不正な商売で稼ぎためる悪銭にたとえられている。要するに、宗教も神を相手とする商売なのです。そこで『コーラン』の中ではこういうことが書いてある。これは有名な言葉でありますが。

「まことに神は（天上の）楽園という値段で、信徒たちから彼ら自身の身柄と財産とをそっくり買い取りなさったのだ。これこそ（ユダヤ教の）律法（トーラー）と（キリスト教の）福音とコーランに明記された神の御約定。さればお前たち、そのようなお方を相手方として結んだこの商取引をありがたいと思わなければならぬ。まったくこの上もない身の幸いではないか」

大変わかりやすいですね。それからこういう言葉もあります。

「誰れか神にすばらしい貸付けをする者はおらぬか。後で何倍にもしてそれを返却していただけるのだぞ」

次に、厳粛な最後の審判の日はどうかと言いますと、

「一人一人の魂が、それぞれ自分の（現世で）得た稼ぎ高だけきっちりと支払っていただき、不正を受けることなど全然ないあの日」

このような内容がわかれば、イスラムは商人がおこした宗教であることがよく理解できると思います。商取引における契約の重要性をはっきりと認識し、敗残者とならないために

思考力を働かせ、活発で現実的な商人の心理を反映させた宗教、それがイスラムの本質でした。戦闘的な宗教ではないということです。

ここで、話を現代にもって参りましょう。何年か前、サウジアラビアのジェッダでイスラム諸国会議機構の外相会議が開かれたとき、私は新聞記者として取材に参りました。そしてホテルのロビーで、パキスタンから来た記者とおしゃべりしたんですが、彼はもちろんムスリムです。国籍も宗教もちがいますが、新聞記者同士は相通ずるものがあるんですね。話のついでに、私はこんなことを申しました。

九世紀のバグダード、一〇世紀のコルドバは、世界でもっとも高度な文明の中心地であり、そのころのヨーロッパは野蛮の国にすぎなかった。そこでヨーロッパの目ざめたインテリたちは、おもにイスラム・スペインに留学して、アラビア語の文献をせっせと翻訳したものだった。それなのに、現在では立場が逆転してしまって、失礼だが、イスラム世界はみな発展途上国だ。これはどういうわけか。皆さんの国は近代化、近代化といっているが、その近代化の足を引っぱっているのがイスラムの保守性だとはよく聞く言葉だが、あなたはどう思うか。

こういいましたら、彼はしばらくお茶を飲みながら考えていまして、次のように答えました。「われわれが今、一所懸命に勉強しているのは西洋のテクノロジーである。これによって新しい国づくりをしようとしている。これが現代に生きるわれわれの使命なんだ。昔はたまたまわれわれの持っている文明の方がはるかにすぐれていた、だから西洋人が学んだ。今はテクノロジーその他の面で西洋の方がすぐれている。だから今度は立場が逆転してわれわれが学ぶ。それが当然ではないか」

そこで彼は、私がさきに紹介した預言者ムハンマドの言葉〈ムスリムはゆりかごから墓場まで学べ〉を引用したんです。そして、「われわれがテクノロジー、現代の技術を学ぶことはイスラムの教えにまったく反していない。それどころか、イスラムがそれをすすめているのだ」こういうふうに言っていました。

さて、イスラムはアラブの膨張とともに広まって行くわけですが、七、八世紀における膨張の過程で、彼らはどのような異文化と接触したでしょうか。アラビア半島から東北へ進んだら、そこは先に述べましたように、ササン朝ペルシアの世界です。北方のシリアはビザンツ帝国の領土で、そこは東と西の融合から生まれたヘレニズム文化の遺産が残り、同時にユダヤ教社会が存在します。エジプトに入ればアレキサンドリアがあり、そこはヘレニズム文化の中心でした。また、ササン朝ペルシアを越えると中央アジアで中国と接し、パン

ジャブに入ってはヒンズー文化と接しましたから、アラブは先進諸文明とぶつかり、まじわって生きていかざるを得ない。「ゆりかごから墓場まで」学ぶことは山ほどあったわけです。

そのような社会環境で、アラブは自分たちがもっていた伝統的な価値観、規範、文化というものを縦糸に、異文化を横糸にして新しい布地を織り上げて行く。こうしてでき上がったのがアラブ文明、あるいはイスラム文明と呼ばれるもので、西洋では俗にサラセン文明といわれています。したがって、これは融合文明であり、融合文明だから普遍的文明であるのです。「ギリシアの古典をアラビア語に翻訳して保存し、中世のヨーロッパに伝えた」というだけでは、まったく不十分な理解です。

イスラム文明はたしかに翻訳から始まりました。アラブは先進文明に対して偏見をもたない。何でも取り入れて行くということです。そして、信教の自由を認め、才能ある者をどしどし登用し、学問の発展のためには金にいとめをつけない。このような政策が普遍的なイスラム文明の形成に大いに貢献したといえましょう。

九世紀のバグダードを眺めると、このことがよくわかります。千一夜物語から連想されるはなやかな時代で、アッバース朝第五代のカリフ、ハールーン・アル＝ラシード（在位七八六～八〇九）が君臨していました。千一夜物語を見ても、彼の登場回数はいちばん多く、五〇回も出てくるそうで、紀元八〇〇年に西ローマ皇帝として戴冠したフランク王国のカール大帝と友好関係を結んでいます。

文化の興隆には情緒的な面と知的な面とがあるとすれば、ハールーンは前者のチャンピオンであります。もちろん、彼は若いころ、小アジアに遠征するたびにギリシア語の文献を収集して帰り、父親からアル＝ラシード（正道を踏む者）という美称をもらいましたが、彼が実現したのは、情緒的栄華であり、それゆえにこそ、彼は芸術の一大スポンサーでありました。

これに対し、私がこれから申し上げる知的栄華の擁護者になったのは、彼の息子で第七代カリフになったアル＝マアムーン（在位八一三～八三三）でありました。彼が千一夜物語に登場する回数は八回で、お父さんに比べれば大へん少ないが、それでも索引を頼りに調べてみると、「これまでのカリフのなかで、彼ほど学問に詳しく、興味をもち、かつ造詣の深い人物はいなかった」というふうに書かれています。

それでは、この知的栄華、情緒栄華の中心であったバグダードとは、いったいどんなところであったか。それをまず紹介する必要がありましょう。バグダードはチグリス川に面し、ユーフラテス川に近い。こういう利点に目をつけた第二代のカリフ、アル＝マンスール（在位七五四～七七五）は、ここに

四年がかりで新首都を建設（七六六年）、マディーナ・アル＝サラームと命令しました。マディーナは都、サラームは平和、平安の意味ですから、そのころの唐の都の長安、また、それを真似た日本の平安京と同じ発想です。為政者に共通する同時代的発想として面白いですね。しかし、唐の史書には「円城」としるされています。円形の城壁に囲まれていたからで、私が読んだある本には、次のように描写されています。

「この都は円形で、深い溝に隔てられたレンガの二重の城塞があった。二五メートルの高さのある第三の壁は特に町の中央部を取り囲んでいた。城壁には四つの門があり、そこからは車の軸の図のように四つの幹線道路が帝国の四つの方向を目指して放射している。都は〈緑のドーム〉と呼ばれる王宮と寺院を中心として、同心円を描くように設計されていた。三〇キロにもわたる波止場はチグリス川に面しており、ドックや倉庫にそって軍鑑から遊覧船に至るまで、またはシナから来たジャンクから、今日でも見られる空気でふくらました羊の皮づくりのイカダに至るまで、数百隻の船が停泊していた。町の市場に到来した商品は、まずシナからは陶器、絹、麝香（じゃこう）、インドやマラヤからはスパイス、鉱物、染料、中央アジアからはルビー、瑠璃（るり）、布地、トルコ人奴隷、ロシア、スカンジナビアからは蜜、蠟（ろう）、毛皮、白人奴隷、東アフリカ地方からは象牙、金粉、黒人奴隷などである。市場のある特別区は中国の商品専門であった。帝国の各州からもさまざまな品が海路やキャラバンによって運ばれてきた。すなわち、エジプトの米、麦、麻布、シリアのガラス細工、金物類、くだもの、アラビアの錦、真珠、武器、ペルシアの絹、香料、くだもの、野菜などである」――

まあ、ざっとこのようなものです。これだけでも賑やかなことはおわりでしょう。このような豪華な都を舞台にして千一夜物語さながらの歓楽の夜が繰り広げられるんですが、それについてフランスの歴史家がこんなことを書いています。さあっと読みますのでお聞き下さい。

「敬虔に夕べの祈りを唱えた後、ひとびとは詩句を唱し、歌のあいまに杯を上げた。歌い手の声とリュートの響きとは、流れる水のささやきと香炉をたちのぼる芳香にうちふるえる空気の中に、しだいに盛り上がっていくそのメロディーをしみこませていった。思いがけない出来事が日々の祭りに変化を与えた。すなわち活気あふれる能弁な罪人の尋問、がさつで高慢ちきな乞食僧の来訪、またある時は、宴席のあいだに打ち落とされる首などがそれである。夜がふけ、酔いが胸を重くするころ、ひとびとは涙を流し、人の世のはかなさを歌った詩句を口ずさんだ。かくして夜明けが忍び寄ると、まだ立っていることのできる会食者たちは、暁の祈りを敬虔に唱えた。激しくもまた繊細な感情、あるいは野卑と洗練とに満

ちたこの生活については、われわれはルネサンス時代にその類似性を見出すことができるのである。それはまた、歴史家や詩人たちが『千一夜』『歌の書』『黄金の牧場』などにみごとに描いているところのものである」

ところがこのアラブは、世俗的な栄華を極限まで広めようと努力したばかりではありませんでした。彼らはまた、知的な思索の領域でも主になろうと欲した。ムハンマドは次のように語っています。

「最も恵まれた者は、朝に夕に神の姿を見る者であり、最も祝福された者は官能の喜びを超越した者であって、それはちょうど大海が一しずくの露にまさっているようなものである」

これを理解することのできる少数の知識人、学者は、肉欲のかなたには瞑想があること、最高の陶酔とは認識であることなどをこの章句から推論しました。こういう考え方が九世紀のバクダードを支配したのであります。

アッバース朝の初期百年のカリフには名君が多く、「円城」を建設したアル＝マンスールは、宮廷を訪れたインドの学者が持参したヒンズー語の天文学と数学の論文を翻訳させて、イスラム世界におけるこの二つの学問の基礎づくりを行い、またハールーンは天文台を建てています。しかし、このような学術奨励者の頂点に立つのがアル＝マアムーンであり、レバノン出身でアメリカに帰化した大学者、フィリップ・ヒッティは『アラブ史の形成者たち』（一九六四）のなかで――この本を私は大学でテキストにして使っているのですが――彼の業績を次のように端的に紹介しております。

「多数のカリフが軍事上の業績でアル＝マアムーンをしのぎ、また政治的手腕、行政上の能力で勝っている者が多いが、彼の合理主義および異国の学問の奨励において、彼に匹敵する者はだれもいない。彼がバグダードで創始した知的活動は、ギリシア語やシリア語の著作の翻訳を含むが、イスラム史における最も初期のものであり、また、思想の歴史において最も重要なものの一つであった」

ギリシアの学問に触れる前に、もう少し数学に関する事柄についてお話しましょう。それは論文とともにインドから十進法の基礎になる数字が入って来たことです。これは後にヨーロッパに輸入され、アラビア数字と呼ばれていますが、アラビア語では依然出所を明らかにしてインド数字と呼ばれたままです。とくに零の導入が重要な役割を演じました。これによって「負」の概念が明らかとなり、数学に飛躍的発展をうながします。代数学はアル・マアムーンのころ生まれています。しかし、ヨーロッパでは十進法と零を受け入れるまでには、少なくとも二五〇年かかりました。零という、それ自体が内容をもたない数学的表示の概念は、ヨーロッパの数学

者にとっては意義をもたなかったのだ、と学者は解説しております。この二五〇年という歳月は、イスラム世界とヨーロッパのキリスト教世界との文化水準の差を示しているといえるでしょう。

アル＝マアムーンが少年のころ、バグダードには中国流の製紙工場が建てられています。この製法は中央アジアのサマルカンドから伝わったものです。半世紀前の七五一年、アラブ軍は中央アジアのタラスで唐の軍隊と戦って大勝、多くの捕虜を得ましたが、そのなかに何人かの紙漉き工がいたのでサマルカンドに連れ帰り、工場をつくらせたのです。これは、中国の製紙技術が、中国より西に伝わった最初であります。当時、イスラム世界で行われていた紙は、ヨーロッパと同じように、小羊の皮をなめした羊皮紙とエジプトのパピルスでした。中国の紙は、麻や亜麻の繊維やそのボロを原料として水ですくから安上がりで、製品が美しく、しかも、折ったり綴じたりすることができるという便利性をそなえています。情報伝達上のこのような強力な「兵器」が自前でできるようになったのですから、バグダードにおける知的活動に大きなはずみを与えずにはおきません。すなわち、知的情報量の爆発的増大という現象が生まれるわけであります。

後日談になりますが、この製紙工場はやがてダマスカスとカイロにできて羊皮紙とパピルスの産業を駆逐し、その製法は十進法の伝播と同じく北アフリカ、スペインを経由して、十二世紀末のフランスで、キリスト教世界初の中国式製紙工場ができました。作家の陳舜臣氏は随筆集『西域余聞』のなかで次のように書いています。

「サマルカンド工房からスペイン工房まで四百年の差があった。これがイスラム教圏とヨーロッパ圏の文化の差になっていたのだ」

さて、アラブは大征服によって多くの異文化に接したわけですが、そのなかで最も強い影響を与えたのがヘレニズムでした。西アジアでこの思想が栄えたのはシリア地方でしたから、ギリシア語を身につけるのは、シリア人にとって教養人の目印になったものです。そこでギリシア語の文献はまず、アラビア語の親類であるシリア語（現在は廃語）に訳され、それからアラビア語へ――という重訳の形をとります。ギリシア語からアラビア語へという直訳が主流になるのは、アル＝マアムーンの時代の後半以後のことであります。

ギリシア語の著作のなかで最大の影響力をもったのは何かと問われれば、学問にはいろいろの分野があるので、一点を選ぶのは大へんむずかしいのですが、アリストテレスの『論理学』と答えるのには、だれも異存を出すまいと思います。このアラビア語版には彼の『修辞学』と『詩学』が含まれて

いたからなおさらのことです。神学者や法学者を含む学者たちはその立論の基礎にギリシアの論理学を置いたわけで、わが国におけるイスラム史の権威である嶋田襄平先生はこの点につき、次のように書いておられます。

「イスラム正統派の神学体系が長く合理性・安定性、客観性を維持し続けたのは、その根底にアリストテレスの論理学があったからである」

バグダードのあるじとして、学術の擁護・奨励者であったアル＝マアムーンは、イスラムの教義は理性による判断と一致すべきだとする合理主義者で、ギリシア哲学を愛しました。こんな話が伝わっています。彼の夢のなかにアリストテレスが現れ、「理性と聖法とのあいだには、本質的な差がない」と保証したというのです。先発の諸文明はバグダードで、アル＝マアムーンの意思のもと、融合現象を起こし始めました。この成果がアラブ・ルネサンスと呼ばれるもので、これはヨーロッパにおける、自然科学を中心とした一二世紀ルネサンスの源流になる。文明史上、なくてはならぬ彼の存在理由がここにあります。

ヒッティは代表作『アラブの歴史』（岩永博訳）のなかで次のように述べています。

「バグダードの政権成立後、四分の三世紀のあいだに、アリストテレスの主要哲学書、主要な新プラトン派注釈者の著作、ガレノスの医学者の大部分、それにペルシアおよびインドの科学書が、アラビア語で読めるようになった。わずか数十年のうちに、アラブの学者たちは、ギリシア人が数世紀かけて発達させたものを同化してしまったのである」

アラブは、かつて世界征服をめざして進撃したように、学問の征服を志したわけであります。この知的活動のハイライトを成すのが、八三〇年、アル＝マアムーンが設立した「バイト・アル＝ヒクマ」であります。バイトは「家」、「ヒクマ」は「知恵」ですから「知恵の館」となります。この施設につき、私は以前紹介したことでありますので、ここで復唱させていただきます。

「これは彼の合理主義の発露をなすもので、今でいえば図書館、研究所、翻訳センターを合わせた総合文化研究所であり、彼自身しばしば訪れては学者たちとの議論を楽しんだ。その規模は当然（ササン朝ペルシア時代の）ジュンディ・シャープールに勝り、内容からいえば、ヘレニズム時代のアレキサンドリアに栄えたムーセイオンの設立以後に登場したもっとも重要な研究・教育機関だ。そして、この新設の研究所の総裁に任ぜられたのは、わずか二十歳のネストリウス教徒、フナイン・イブン・イスハーク（八一〇～七七）という翻訳の天才であった」

フナインがイスラム教徒ではなかったことに注目しましょ

う。彼は宰相以上の俸給を受けた上に、ギリシア語の写本一冊を翻訳するたびに、訳書と同じ重さの金貨をアル＝マアムーンから仕払われ、アリストテレスの最初の翻訳に対しては、同じ重さのダイヤモンドが代価だったといわれます。こうして学者、知識人たちはプラトン、アリストテレス、ピタゴラス、エピキュロスおよび新プラトン派のプロティノス、アポロニオス、医者のヒポクラテス、ガレノス、ディオスコリデス、さらにはユークリッド、アルキメデス、プトレマイオスらの著作を、ヨーロッパ人よりずっと以前から知っていました。自然科学の面でいえば、医学、化学（練金術）、天文学、数学および物理学がこれほど究められたことはありませんでした。そのころのフランク王国の貴族たちは文字が書けず、アラブの支配者たちが哲学にこっているとき、契約書にしるす自分の名のサインのしかたにこっている有様でした。ヒッティはさらに申します。

「思想の伝達は、文化の発達のなかでは、思想の創造に劣らぬほど重要な役割を演ずる。しかし、九世紀のアラブは翻訳者や伝達者であるばかりでなかった。彼らの知識の貯水池は、入り口があるように、出口をたくさんもっていたから、そこを通過したものの多くは彼ら独自の貢献によって豊かなものになったのである」

時間が参りました。講演を終わるに当たり、右のヒッティの意見を補強する意味で、アメリカの科学者ジョージ・サートンの不朽の書『科学の生命』（一九四八）の一部を、孫引きですが、引用させていただきます。

「アラビア語で著述を行った学者の活動の主な領域は、ギリシアの著作の翻訳とその同化にあるが、彼らははるかにそれ以上のことをなした。彼らは単に古代の知識を伝達しただけではなく、新しいものを創造した。（中略）一二世紀にも満たないあいだに、国際的な、しかも百科全書的な規模をもつ新しい文明を創造したことは、それをわれわれが描くことができるとしても、完全には説明することのできない何物かである。これをアラビアの奇跡といわなければならない」（武隅良一訳）

御清聴、まことにありがとうございました。